

聖学院歴史探訪

#1 聖学院をつくった人々

最初の宣教師①
-スミス夫妻-



学校法人聖学院の礎は、今から100年あまり前に、アメリカのディサイプルス派の宣教師たちによって築られました。ディサイプルス派がはじめて日本へ派遣した宣教師は、スミス夫妻とガルスト夫妻で、それは1883年（明治16年）のことでした。

翌年、横浜で日本語を学んだ2組の宣教師夫妻は、秋田に向かいました。それは、まだキリスト教の福音が伝えられていない地方へ行く、という志からでした。ミッシヨナリー・スピリットは、フロンティア・スピリットでもあったのです。

しかし、1年半後、スミス夫人と生まれたばかりの次女は亡くなります。なれない日本の気候や習慣が影響したのにながれありません。この知らせを受けたアメリカの教会の人々は、驚き、嘆き、そして使命のために死んだスミス夫人のことを永く記念しようと、献金をしました。そして、その献金によって、秋田県庁の前に3階建てのスミス夫人記念会堂が建てられました。それは、当時としては、県内最大の建築物であったと言われています。

出典：聖学院・女子聖学院中学校高等学校 聖書教科書編集委員会編『神を仰ぎ人に仕うー召命に生きた人々ー』改訂版、聖学院大学出版会、2014年（出典より一部変更）

学校法人 聖学院

理事長／清水 正之 院長／山口 博

〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-8351

ホームページ <http://www.seig.ac.jp> E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学

・政治経済学部／政治経済学科 ・人文学部／欧米文化学科 日本文化学科 児童学科 ・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水 正之 創立／1988年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院

政治政策学研究科／アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科／人間福祉学研究科
創立／1996年 〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園

園長／山川 秀人 創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820 Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校

校長／角田 秀明 創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1 Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校

校長／山口 博 創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2 Tel 03-3917-2277

聖学院小学校

校長／佐藤 慎 創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1 Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園

園長／佐藤 慎 創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2 Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

<https://www.seig-asf.jp/fund/>



住所変更・お問い合わせは下記までお願いします。

学校法人聖学院ASF事務局 Tel 03-3917-8352

ASF NEWS

ALL SEIGAKUIN FELLOWSHIP NEWS

& Seig

No.

56

Jun.2018



【特集・対談】

聖学院大学30周年

聖学院みどり幼稚園40周年



message

ご挨拶

学校法人 聖学院
理事長

清水 正之



プロフィール

1947年横浜市生まれ。東京大学文学部倫理学科卒業後、同大学院人文科学研究科倫理学専攻修士課程修了。同博士課程単位取得退学。博士(人文科学)。2008年聖学院大学人文学部教授に就任。2015年聖学院大学学長に就任。2017年学校法人聖学院理事長に就任。

聖学院は1903年、米国基督教会外国伝道協会とアメリカ人宣教師H・H・ガイ博士によって聖学院神学校が設立されたことにより、最初の種が蒔かれました。

その後、中里の地に、B・クローソン先生、石川角次郎先生、平井庸吉先生方によって、キリスト教信仰による人格教育が始まり、聖学院中学校(旧制)及び女子聖学院普通学部としてそれぞれ発展し、現在は幼稚園から大学院まで一貫教育体制を整えるに至りました。

聖学院は、今日まで一貫して「神を仰ぎ 人に仕う」を建学の精神として、教職員一同の献身的奉仕のもと、歴史と伝統を築きつつ、多くの個性豊かな優れた人材を社会に送り、本学院の使命を果たしてまいりました。

「オール聖学院フェローシップ」(略称ASF)は1988年10月、聖学院大学の開学を機に関係者各位のご協賛を頂き設立致しました。ASFは、聖学院諸学校に関わりを持った方々がそれぞれの諸団体に呼びかけ、自発的な寄付行為をもって全聖学院を側面的に支援して行く団体であります。「神を仰ぎ 人に仕う」のスクールモットーを掲げ、教育というミッションを遂行する聖学院、そこに関わりを持った一人一人の寄付行為で支援しようとの機運が熟し、ASFが設立されました。

そもそもの発端は1986年12月、聖学院各校の卒業生、関係者らが一堂に集った第1回オール聖学院フェスティバルの熱い想いと伺っています。大学設立という悲願の成就と同時期にスタートしたASFを通して、拡充・強化されながら続いている学校法人聖学院への崇高な財政的支援が、各学校の教育環境整備に大きく寄与し、さまざまな教育事業を実現させてきました。ASFは学校法人聖学院に寄付をして頂いた方々に会員となって頂き、皆様方と共に聖学院の発展を促進していくものです。

これまでに、聖学院中学校高等学校(校舎・講堂棟)、聖学院大学チャペル・関連施設、聖学院大学8号館、ガルスホール、女子聖学院中学校高等学校(校舎・教室棟)、聖学院幼稚園園舎等がその一部をASFより援助を受けてまいりました。

固有の教育的使命を貫き、100年を超えるプロテスタント・ミッション・スクールとして、常に人を中心に置いた先進的な教育

を実践してきた聖学院は、豊かな個性と能力を培った卒業生の活躍という実りによって、社会への貢献を果たしてきました。拡大を続けるグローバル化によって抜本的な教育の変革が求められている今、明治期以来とも言われる国家的規模での教育改革が進行しています。私どもとしては、できる限りの高度な教育を施したいという創立時からの教育理念のもと、幼児から二十代以上までの一人の人間を一貫して育てる体制を備えた全国有数の学校法人、聖学院に寄せられる期待に、しっかりと応じていかなければなりません。

今や聖学院は、その厚みある伝統を生かし、そのうえで、現代の人間や社会の課題に応えるべく、その教育は新しいステージへ足を踏み入れようとしています。今年は聖学院大学が創立30周年を迎えます。創立以来、面倒見の良い大学として、それにふさわしく一本の理念のかよった丁寧な教育が一定の評価を勝ち得てきました。同時に30年の伝統はまた現代的な課題に応える学部学科の改組が必要となってきました。あらたに従来の政経学部を中心に、人間福祉学部を心理福祉学部心理福祉学科に衣替えし、児童学科を人間福祉学部から人文学部に移し、人文学部が児童学科、欧米文化学科、日本文化学科の三学科体制となりました。幸いこの改組は高校、受験生に受け入れられ、今春の入試では、定員を超える614名の新入生を迎えることができました。留学生教育の充実を含め、一層の教育の質的な高度化をこころして追究したいと願っています。

聖学院大学は、都市部周辺にあり、その利便性では学生のニーズに応えにくい立地であります。以前から大学関係者は、学生のいわゆる「居場所」を作ることに腐心してきました。地域連携の拠点たる1 café、留学生を支援する留学生センターと既存の施設を使って、設置してきました。今30周年を祝うにあたって、学生生活の、また学生の諸活動の中心となる「学生会館」の設立を中長期の目標に掲げました。ASF会員のみなさまのご理解とご支援を賜りたいと願っています。

学院は5年後そして10年後の中長期目標を掲げて、一層の聖学院ファミリーの発展を展望し聖学院の理念に沿った教育の実現を力強く目指そうとしています。関係者ご一同の、一層のご支援ご声援をASFの活動にお寄せいただきたく、心よりお願い申し上げます。

& Seig
ASF NEWS
ALL SEIGAKUIN FELLOWSHIP NEWS

No.
56
Jun. 2018

CONTENTS

03
& Talk [聖学院大学] 30周年対談

07
& Talk [聖学院みどり幼稚園] 40周年対談

11
[聖学院中学校・高等学校] 教育ビジョン

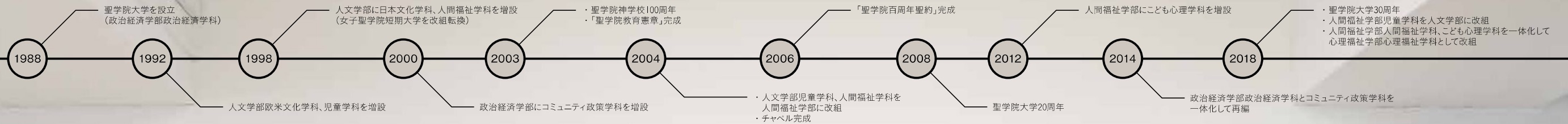
13
[女子聖学院中学校・高等学校] 教育ビジョン

15
[聖学院小学校・聖学院幼稚園] 教育ビジョン

17
Seig NEWS

35
聖学院歴史探訪

編集／学校法人聖学院 学院広報センター
印刷／田宮印刷株式会社
デザイン／株式会社キュー・ジー
発行日／2018年6月20日



建学当時是什么样的大学でしたか？

また現在と当時の学生の違いなどありますか？

清水 大学開設初年度に私は短期大学に非常勤として着任しました。短大生は今までの校風・学風が変わってしまうのではないかという不安があったようで、大学の男子学生と短大生との間にはお互いに違和感があるのを感じました。大学のことでいえば、新しい大学で倍率も高いが東京に近く、独特な雰囲気を持ったプロテスタントの大学という取り上げられ方がされていたように思います。

まだモットーとかではありませんでしたが、『面倒見が良い』というような指導はその当時からすでにありました。先生方も職員も本当にこまめだし、一人ひとりの学生を知ってますし。学生と教職員が近かったから、個々の学生が気になるんですね。

久保田 教員自身に対しても、とても親切なのが私の第一印象ですね。職員の方も些末なことでも色々教えていただき、親切に対応してくださいました。

清水 現在の学生は基本的に優しいですね。一方で、弱いなと思うと

ころもあって、真面目で素直ではあるけれど、融通が利かなかつたり、ちょっと打たれ弱かったり、応用が効かなかつたりするのかなとは感じます。否定的に言ってしまうがちですが、優しいという点は基本的に「良さ」だと思います。当時は授業が終わって『ありがとうございました』とは言われませんでした、今は言われます。

杉本 私は学生として2006年度から4年間本学に在学していましたが、2013年度に職員として戻ってきた時に、以前よりやんちゃな学生は減ったなと感じました。一方でボランティアが盛んになって、人の役に立ちたいなど奉仕の気持ちを持った学生が、受験生を含めて増えたように感じます。その学生たちの話を、オープンキャンパスなどで聞いた高校生がボランティア目的で入って来てくれたり。結果、優しい学生が増えていったのかな、と感じています。

清水 学生の活躍といえば、最近の学生はボランティアやオープンキャンパスの手伝いなど他者貢献に積極的です。その活躍の場を我々がもっと動きやすいようにしてあげられないかなと思っています。学生が独自に動いている大学としてこれからより発展させていきたい

です。ずっとそういう土壌があって、サポートする先生や職員たちがいて、少しずつ色々なものが出来てきて、この30周年を期にもっと、という流れもあります。

主にどんな行事を予定されていますか？

杉本 まず、ホームカミングを卒業生の方が母校に帰ってくるイベントとして企画しています。それと聖学院大学のこれまでの歩みをお伝えする記念誌の制作を進めています。記念グッズも作っていて、今できているのは、30周年記念紙袋。職員がデザインしたのですが、とてもかわいくておしゃれなデザインに仕上がっています。今までは濃いめのグリーンや紺色でしたが、新しい未来に向かっていくようなイメージで明るいグリーンで作成しました。学生に向けては大学公認を目指しているゆるキャラ「宮原聖子」のオリジナル手帳シール。遊びやご飯など日頃使えるようなものから、礼拝やレポート提出など本学らしいテーマも入っています。またコラボお菓子も企画しています。『さいたまミツバチプロジェクト』さんとコラボしたさいたま市内の養蜂場で採れた蜂

蜜を使ったお菓子です。

清水 あとは大学の屋上に養蜂場を作るっていう夢を持っていますけど(笑)。蜂蜜を学生と一緒に採る。刺されないようにしないかね。

杉本 メインはオープンキャンパスで配る予定ではありますが、可能であれば、ホームカミングでも配布したいですね。卒業生の方にも召し上がっていただきたいです。

それと、学生会館の設立も構想しています。学生が自主的に活動し成長していけるような学生のための建物です。それを建設すべく、これから寄付を募っていくという形になります。

大学は卒業生にとってどんな場所ですか？

杉本 私がここに勤務する前ですが、ふらっと遊びに行くと、当時の先生に久しぶりにお目にかかって、名前も忘れられているだろうな、と思っていたのに、覚えていてくださったり。そういった先生がいるという安心感があります。

聖学院大学 & Talk 30周年対談

清水 均

・人文学部長
学長特別補佐
・30周年記念事業
実行委員長

1957年横須賀市生まれ。1991年に女子聖学院短期大学に着任。1999年より聖学院大学専任教員となる。学生部長、日本文化学科長、副学長等を経て、現在人文学部長、学長特別補佐、アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科長。30周年記念事業実行委員長。

久保田 翠

・人文学部 児童学科
准教授

1979年札幌市生まれ。ピアノとソルフェージュを5歳から始める。作曲家としてこれまで数多くの委嘱作品が演奏されている。また編曲家・パフォーマーとしても活発に活動を行っている。2017年より聖学院大学人文学部准教授。

杉本 雅彦

・広報部
アドミッション課職員
・30周年記念事業
実行委員会
プロジェクトリーダー

1987年川口市生まれ。2006年聖学院大学入学。在学中はSPO(聖学院大学フィルハーモニー管弦楽団)に在籍。卒業後、社会人経験を経て2014年より聖学院大学学生課職員として入職。2017年より広報部アドミッション課職員。30周年記念事業実行委員会プロジェクトリーダー。

清水 大学祭はもちろん、普段の日でも今日は休みだから来ちゃいましたとか、急に来たりします。子ども連れて来る卒業生って結構いて研究室が託児所になっていたり。もう一度来たいと思わせる雰囲気があるんでしょうね。チャペルで卒業生が結婚式を挙げた例も過去に数例あります。教職員学生混合のアーチスト集団がチャペルで演奏するというようなことも出来るようにと思っています。

久保田 昨年の夏、オープンキャンパスの体験授業（模擬講義）で、チャペルを使って、親子向けにボディーパーカッションを行ったところ、OB・OGの方がご自分のお子さんを連れて来られていましたから、チャペルを開放するという流れには可能性を感じます。

清水 僕は高校の方にも意識があって、埼玉周辺は吹奏楽部や合唱が強いから、練習場として使ってくれないかな、と思っています。高校同士でジョイントして将来的には演奏会を開いたり、聖学院から音楽を発信する、音楽文化の拠点になるというような。

杉本 1〜2年前にもやりましたよね？

清水 やりました。大宮光陵高校と桶川高校がチャペルでやりました。是非高校でも使って欲しいですね。



杉本 先ほどの周年事業のホームカミングのなかでも、オーケストラの現役の学生たちと卒業生と一緒に演奏して、お客様に聴いていただくといった卒業生と在学生のコラボ企画なども案に上がっています。卒業生とのリレーションシップという面でも、もっともっと帰って来て欲しいなと思います。

これからの30年、聖学院大学は、どのような学生を育てていきたいですか？

もしくは学びをどのように展開されますか？

清水 ある企業の方と一緒に仕事をしたときに、聖学院大学は幸福度が高いプータンみたいな大学と言われました。ここで過ごす4年間のその瞬間瞬間に幸せを感じて、そして振り返っても『幸せだったな』という大学であって欲しいと思っています。その幸せは、学生それぞれですが、大学にいる時に何かをやった、ハードルを超えたという満足感を持って欲しいし、在籍時には、居心地の良さも感じて欲しいです。これからの学問のお話をすると、かつて人文学部にあった児童学科

が、いま戻ってきたという点がすごく大きいです。私は教育が社会のなかで大きな位置づけを占めと思っています。これからの世代を育てていく人を大学が育てて、欧米は、英語の中高の教諭を、日文は国語の中高の教諭を、児童が幼稚園、保育士、小学校、特別支援と児童英語の教育に携わる人というように、人文学部全体が教育者を育てるという一つの特徴を持ちます。しかし教育者は資格を取ることでなれる訳ではなく、資格を持っても使えなければ意味がありません。それを使える人間というのは、やはり人格の問題にかかってきます。経験であったり、知識であったり、教養などを備えていなければ、教育者にはなれません。人文学部は人文だから文化を学ぶところです。文化というのは人間の営みそのものを意味し、教育者になろうとする人はそういった文化を学んだ教育者なのです。教育者を育ていく学部をさらに強化していきたいと思っていますし、教育者たるべく文化への眼差しを持ち、文化を作っていく者を育てる学部にしていきたいと思っています。

久保田 学生は、社会に出て働くなかでサバイブしなければならず、そこから先は先生方はサポート出来ないし、自身の足取りで頑張らなければなりません。その際に、自分はやれば出来るという自己信頼というか、絶対的な自己肯定感がベースとして必ず必要になるので、大学にいる間にそこを育てていただければいいな、そのうえでサバイブして欲しいな、と思います。また、人文学部に児童学科がいらせていただくということで、実はこの曲にはこんな背景があって、ここと繋がっていてとか、文化をベースに教えられるようになると思います。



清水 「すべての芸術は音楽に嫉妬する」という言葉があって、それがすごく腑に落ちますね。音楽は一瞬にして気持ちを持って行かれます。先ほど述べたように、大学から音楽を発信するというのは良いと思うんですね。JTBさんと関係があるのですが、宮原を音楽発信の地にしたいという話をずっとしています。久保田先生にも是非お力を借りたい（笑）。

久保田 いいですね。チャペルもあるし、ピアノもあるし。

清水 音楽を奏でて、それが幸福の象徴みたいになってね。今まで『面倒見の良い大学』というものが一つの標語として浸透してきましたが、『面倒見の良い』という言葉は誤解されやすく、何でも手をかけてしまう、甘さもそこに裏腹に見られてしまう、そういったとこ

ろを少し変えようと、制作会社の協力で、学生と教職員がワークショップを実施し、言葉を作っていました。そこで『一人を愛し、一人を育む。』というタグライン、つまりは「大学からの約束」というものが出来て、それを30周年で全面に出していこうと。では、愛された一人、育まれた一人とはどういう人なのですか？という、それは先ほどの幸福感を持った学生であり、そうなって欲しいです。



最後にASF NEWSの読者の方にお伝えしたいことがありますしたらお願い致します

清水 寄付。後輩たちのために学生会館は絶対必要です。お願いします（笑）

久保田 経験や体験が世代を超えて継承していった欲しいと思います。児童学科ですと、実習先で卒業生が働いていらっしゃることもあり、短大時代を含めると歴史が長いので、元々ある縦のつながりを30周年をきっかけに再認識していただければ良いな、と思います。

清水 そのためにも卒業生には、ぜひホームカミングに来て欲しいですね。

30周年記念行事一覧

政治経済学部創設30周年記念公開講演会

- ①6月27日(水) 10:40~12:10
- ②7月18日(水) 10:40~12:10
- ③10月24日(水) 10:40~12:10
- ④11月7日(水) 10:40~12:10

全学礼拝 一本学卒業生による奨励一 10月中

創立記念講演会 10月17日(水) 10:40-12:10

創立記念音楽会 ーウィーン・ピアノ四重奏団ー 10月27日(土) 14:00~

創立30周年記念 シンポジウム 11月24日(土) 時間未定

ホームカミングデイ 12月8日(土) 時間未定

30周年記念刊行物一覧

『キリスト教と諸学Volume.32』 2019年3月
『大学創立30周年記念誌』 2018年度中(予定)

2018年度 2つの学部・学科が開設！



人文学部 児童学科

子どもがいない世界はない。
育てる人になろう。

児童学科は、1975年に女子聖学院短期大学に創設されて以来、40年以上の歴史と伝統をもっています。このたび、特別支援教育と児童英語教育を新たに加えて、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援学校教諭・児童指導員など育てる人になって子どもに寄り添い未来を生きる人を養成します。



心理福祉学部 心理福祉学科

「ともに生きる」社会の
実現を目指して学ぶ

人間福祉学部「こども心理学科」と「人間福祉学科」を統合した「心理福祉学部心理福祉学科」が2018年4月にスタートしました。

子どもから高齢者まで、健康な人もそうでない人も、ともに生きる社会の実現を目指し、それに貢献できる人材を育てる学科です。

心理と福祉の両サイドから学び、トータルに人と社会について考える力をつけていきます。

聖学院 みどり幼稚園 40周年対談

&Talk



小山 浩史
同窓会長

1980年に女子聖学院短期大学付属幼稚園(現・聖学院みどり幼稚園)卒園。幼稚園創立30周年を機に立ち上がった同窓会発足に携わり、その後同窓会長に就任。自身の子どもみどり幼稚園を卒園し、保護者となった今も幼稚園との関係が続いている。

山川 秀人
園長

1989年より聖学院大学・女子聖学院短期大学学長秘書、その後学長室長、学務部長、総務部長、人事部長等を経て2010年より統括総局長。2013年聖学院大学附属みどり幼稚園(現・聖学院みどり幼稚園)副園長、2014年より園長。2018年からは事務総局長を兼務。

本田 ゆかり
先生(主幹)

東洋英和女学院短期大学・保育科卒業後、キリスト教保育の私立幼稚園に勤務したのち、1990年より女子聖学院短期大学付属幼稚園(現・聖学院みどり幼稚園)に着任。教諭、主任教諭を経て、2017年度より主幹として毎日子どもたちや保護者と関わりを持っている。

創設40周年を迎え、 当時と今、そしてこれからのみどり幼稚園を 園長、先生、卒園生兼保護者、 それぞれの立場から語っていただきました。



40周年を記念するシンボルマークを作成しました。色とりどりの葉は卒園生や在園児を表し、木の幹は子どもたちを支える先生達、そして木を取り巻く保護者の方々を表しています。

創設当時はどのような幼稚園でしたか？

保護者が幼稚園に求める内容の変化などありますか？

山川 40年前、みどり幼稚園は、聖学院大学の前身である女子聖学院短期大学の付属幼稚園という形でスタートしました。短大には児童教育学科があり、その実習園という役割ですね。

社会の状況で言えば核家族化にくわえ女性の社会進出が進み、共働き世代が徐々に増えてきていることから社会的な幼稚園へのニーズも、かなり変化してきています。具体的には、親御さんたちが子育てに関する負担をできるだけ少なくしたいという思いと、また子どもを出来るだけ長い時間預かって欲しいというのが現代のニーズではないかと実感しています。

みどり幼稚園は、家族が子どもを見守る環境や子どもと一緒に過ごす時間が大切という思いから預かりなどにはあまり積極的ではなかったのですが、昨今は預かり保育も以前より長時間になり、お弁当を作るのが負担になるというご要望から給食も部分的にとりいれました。ただ子どもたちは親のお弁当がすごく楽しみですから、全面給食にはせず、最大週2回、残りの3日間はお弁当というようにしています。基本的な考え方は変えたくないですが、ニーズに応えていかねばなりません。



本田 地域の反応としては当時キリスト教保育をする、遊びを中心として保育をするという方針は、かなりセンセーショナルであったろうと思います。何だか変な幼稚園だ、という声があちこちで聞こえたとか伺いました。しかし、キリスト教保育と遊びを中心とした保育というのは、ずっと変わらなくて、周りの方たちの受け止め方にも随分浸透して、また遊びを中心とした保育というのは幼稚園教育要領でも全面的に出していますから、40年経って、好奇の目で見られることはなくなりました。

小山 私がみどり幼稚園に通っていた頃、私の家は幼稚園まで歩いて10分くらいの場所にあるんですけど、今の時代では考えられませんが、自転車通園をしていました。初代園長のクレラー先生に「遠いでしょうから自転車で来てはいかがですか」と言われて、自転車で

通ったんです。当時としてもかなり画期的というか、一人で幼稚園の鞆を提げて、スモックを着て、自転車で来るんですよ。相当変わった幼稚園ですよ(笑)。

山川 みどり幼稚園の敷地は広いので、三輪車はもちろん、自転車なんかもビュンビュン走り回っていますので、ここで自転車に乗れるようになる子が結構いるんですよ。でも、知らない人を見ると危なくないですか、と聞かれることもあります。子どもたちはそこをキチンとわかって注意しながら乗っています。

この幼稚園のやり方は、子どもたちが自分からこれをやってみたい、やりたいという内側から湧き出てくるようなものを育ててあげる。そういう保育が良いと思う人がここに入園させるのでしょう。

小山 そういった考えを敬遠される方もいれば、逆に自分から積極的に子育てに関わっていききたいというお母さんもいます。そういう方がこの幼稚園を選んでいるのかもしれないですね。

山川 本園に来てくださっているご家庭の方は幼児教育に対する意識がとても高いと思います。また、このみどり幼稚園の保育について十分理解して来ている人がほとんどですから、考え方も似ており、保護者の会の活動も、全体的に和気藹々としていて、仕事をしている方へも配慮してくださるし、皆同じことをしなくちゃダメみたいなことは仰らないですから、私たちとしてはとてもやりやすいです。

小山 お母さん方の活動も、バザーの準備などは女子校の文化祭のように盛んですし。お母さんが幼稚園で知り合ってずっと続いているというつきあいですね。『あすなる会』という卒園生や現役のお母さんを中心としたコーラスサークルも、30年、40年以上ずっと続いています。卒園してからも、おつきあいや親交が続いていくということも地域に根ざしている証で、世の中のニーズとしては、長時間保育や早期教育をして欲しいという要望もあるかもしれませんが、一方で、そうではない特色を出していることから幼稚園に通わせる人も多いのではないのでしょうか。

児童学科の実習について

昔と比べた学生の変化はありますか？

本田 聖学院大学の児童学科だけではなく、自分の道をバッチリ決めて来る学生は昔より少なく、実習や見学に来ていてもまだまだ迷っている人が多いですね。現場の先生ではなく研究職の方が良いとか、色々範囲も選択肢も広がっている分、学生もそこをピンポイントで、という風にはなりづらいのかな、と思います。

それと自分が大学生になるまでに、乳児や幼児に接している経験が極めて少なくなってきたので、子どもが好きとか幼児教育をやりたいというより、来て見てわあっと驚くような方が多いかな、という気はし

ます。遠慮して、まだみどり幼稚園に入ったことがないという方が児童学科にも沢山いるので、なるべく来て、いっぱい子どもを見て、幼児教育ってこうだな、楽しいと感じてくれたら良いと思います。

山川 園長としては、単にどこかへ就職するものの一つとして幼稚園を



選択するのではなくて、使命感や召命感を持って就職をしていただきたいな、という思いがありますね。幼児教育というものは、子どもたちが家庭から離れて、はじめて社会に出て行く、社会経験の場ですから、社会人としての人格形成の上でとても大きな意味を持っている時期な訳です。そういう意味で、その責任の重さをしっかりと受け止めて、認識してもらいたいな、と。そこまで学生に言ってしまうと尻込みしてしまうのですが。

本田 責任が重いから嫌だ、と。

山川 もう一つは、このみどり幼稚園の先生たちをよく見て欲しいんですね。まずは、子どもたち一人ひとりをきちんと見る、観察する。そしてその子どもたちに寄り添って、語りかけをすることが出来る。皆さん経験が豊富でそれを出来る先生たちです。その先生たちを見て幼稚園の先生とはこういうものだとしっかり感じてもらいたいというのが私の願いですね。

これからのみどり幼稚園の 展望を教えてください

山川 一言で言えば、世界基準の幼稚園になりたい。例えば国際的な場でも通用する日本人や、リーダーシップを取れる人間を育てたいということです。多くの日本人は、会議になると発言をしなかったり、自分の考えを述べるのがとても苦手です。たとえ良い考えや意見を持っていても、表に出していかなければ、対等にやり合うことは出来ません。国際的な場では、語学力の問題はあるにせよ、日本人が単に引っ込み思案であるとか、プレゼン能力が低いとか、そういったこと以前に、人間としての力(=人間力)の差があるのではないかと思います。別な言い方をすると、意欲や行動力、決断力、さらにはコミュニケーション能力のような、私がよく使う言葉ですが、『非認知的スキル』を育成していかなければなりません。

みどり幼稚園の保育はまさにそれなのです。『非認知的スキル』とは、物事に興味や好奇心、関心を持って自発的に思いを持っていくスキルです。指示されてやるのではなく自分で取り組もうとする力です。そこを養ってのが、みどり幼稚園のめざす保育です。

もちろん理想だけでは成り立たない部分もあります。最近、大学まで持つ大きな学校法人が幼稚園を止めてしまうという所も出始めています。幼稚園が採算を取れないからです。社会的なニーズも取り入れながら、しかし幼稚園の理想をどこまで追い求めていけるか、というのが課題かなと思います。

また、40周年ということで、この園舎は40年間使っています。幸い土台がしっかりしているので、耐震的には大丈夫ですが、ただやはり40年も使っていると色々な所に不具合が出てきていて、例えば給排水の設備で、配管が腐ったり破れたりする問題等が増えてきています。この40年を契機



に、将来のことを考えた改築なり改修なりを本格的に考えなければいけないかな、と。そこが40周年で一番大きな課題かもしれない(笑)。

小山 戻れるところがあると良いと思うので、みどり幼稚園らしさ、みどり幼稚園ってこうだったよなっていう所を残した形でリニューアルを行っていただければ、卒園生としては嬉しいですね。

みどり幼稚園らしさという点で言えば今の世の中は、テクノロジーの発達により疑似的な体験はしやすくなりました。反対に自然の中で実際に生きた草木や動物に触れる体験をすることは減ってきています。いま生きている生き物に触れて得た感覚は、得難いものになると思います。そんなみどり幼稚園の良い特徴を残していただきたい、と思いますね。

山川 ある子どもが遊びの時間にじっと地面を見ているんです。何をしてるか聞くと、虫を追っていると。ずっとその虫を追いかけて過ごしている。大人から見ると無駄な時間のように思ってしまうがちですが、子どもたちはそうしたものから色々な発見をするんですね。自然の中で、誰から言われるでもなく、自分から関心を持って、興味を持って何時間も飽きることなく続けている。みどり幼稚園では、そういった遊びの時間を沢山確保しています。幼稚園としては、今後はその遊びの質を一層重視していく必要があると思います。



40周年記念行事一覧

※卒園生・卒園生保護者参加可

5月25日(金) 10:45~11:30
創立40周年記念礼拝

7月16日(月・海の日) 11:00~13:00
同窓会(40周年を覚えて)

2学期(日時未定)
40周年記念講演会

2月22日(金) 13:00~14:00(予定)
40周年記念音楽会

聖学院 中学校・高等学校

vision for the future
教育ビジョン

角田 秀明 校長

どのような社会でも 生きられる人間の育成

「一人ひとりが神様に生かされていることに気づき、自立した大人になり、皆が幸せな大人になってもらう。」その目標に向けて学校は、保護者の方々と力を合わせて最善のサポートをしていきたいと願っています。親子、友達、先輩、後輩、教師などの人と人との関係性の総体が一人の成人の中に詰まっていると言えます。

1. 家庭と学校の共同作業

- 「子どもが育つ魔法の言葉」の中に次のようなものがあります。
1. 恐れのある家庭に育った子どもは、びくびくするようになります。
 2. 励まされて育った子どもは、自信を持つようになります。
 3. 心から受け入れられて育った子どもは愛するようになります。
 4. 認められて育った子どもは、自分を好きになります。
 5. 安心できる家庭で育った子どもは、自らを信じ、人をも信じられるようになります。

本校では、自己肯定感を育むキリスト教教育に取り組んでいます。聖書は神様からのラブレターと言われることがあります。我々人間一人ひとりには神様から愛され、神様に喜んでいただける生き方をするよう招かれていると思います。

その教育理念を4語の英語に凝縮すると次の言葉になります。

Only One for Others （聖学院教育理念）

一人ひとりが神様からのかけがえのない賜物を与えられているという確信に基づき、それぞれ固有な賜物を発見することを助け、個人の人格の完成へ導く教育をします。その一人ひとりとは他者のために存在し、他者の益になり、他者に喜んでもらえる存在になることを目指しています。



〒114-8502 東京都北区中里3-12-1
Tel. 03-3917-1121
1906年創立

角田 秀明

聖学院中学校・高等学校
校長

埼玉大学教育学部(中学校課程)卒業後、1974年より聖学院中学校・高等学校教諭(英語科)。一時休職し、米国ワシントンD.C. ジョージタウン大学大学院応用言語学修士課程に入学、同大学院修士課程修了後、聖学院に復職。以来、高等部長を16年間、副校長を3年間務め、2016年に41年間に在職した聖学院を退職。その後は学校法人聖学院の理事を務め、2017年第12代聖学院中学校・高等学校校長として着任。

2. 礼拝

本校が大切にしており、わたしの大好きなものの一つに毎朝の全校礼拝があります。中1から高3まで900名が講堂に集まり、8時25分から8時40分までの15分間の短い礼拝ですが、静まって聖書のことばに聞き、自分の生き方、考え方を吟味し、ある時は神様に生かされている恵を感謝し、ある時は決断し行動に移す勇気と力を与えられる時間です。登校して慌しく一日を始める前に、暫し静まって聖書のことばに聴く時間は、生徒それぞれにとって意味深いものとなり、卒業後も一人ひとりの生涯にわたって心のよりどころとなります。

3. 友達との人間関係づくり

中学高校時代はミニ社会と言えるでしょう。その中で多様な体験に打ち込むことで男の子から少年、青年、そして男へと成長していくのです。年齢の異なる生徒たちの交流があるのも中高一貫校の特色です。クラブ活動や生徒会活動などで先輩は後輩を指導し、後輩は先輩の姿を見て成長していきます。幼少期には保護者の関わりが大きいのですが、中学高校時代ではどのような友人関係を持つか、すなわち、相互教育がとても大切です。自由な校風の中、先輩たちや仲間との関わりを通じ、試行錯誤する中で、自分はどんなことに向いているのかおのずと考え始めます。クラブ活動の中で、生徒会活動の中で、体験学習の中でたくさん経験してほしいと思います。



キャリア甲子園 4年連続準決勝ステージへ

聖学院中学校・高等学校ではPBLを導入した授業を展開する中で、2017年度も「キャリア甲子園」（株式会社マイナビ主催）に出場し、4年連続で準決勝のステージに上がりました。

PBL(Project Based Learning)とは、プロジェクト運営を通して生徒が自分たちの力で探究し体験する能動的・協働的な学習の方法です。本校のPBLは、文化祭における「記念祭実行委員」と中2夏期学校「北アルプス蝶ヶ岳登山」の2つの行事から始めて少しずつ取り組みの範囲を広げてきました。PBLはプロジェクトの規模の大小に関わらず、どれだけ質の高い経験を生徒ができたかが重要です。また、いくつかのPBLでは、学習前後に「ルーブリック（評価基準表）」による自己評価を行っています。そこには学習プログラムの目標と達成度が明記されており、何がどれだけできるようになったのか、自分の成長を認知することができます。自己を振り返ることで、生徒は自立(自律)した人間に成長し、自分のうちに秘められた賜物(能力)に気づきます。「自己変革」が起こり、さらに自らを成長させようとするのです。

体験学習や学校行事、授業でのPBL化を始めて6年目になります。この間、全国規模のコンテスト「クエストカップ」（株式会社教育と探求社主催）での優勝や、「キャリア甲子園」で実績を出すようになりました。



女子聖学院 中学校・高等学校

vision for the future
教育ビジョン

山口 博 校長

「女子聖学院中高(JSG)が 大切にしている教育と これからの教育ビジョン」

JSG講座、国際プログラムの充実、
ラーニングセンターといった教育プログラムに加え、
運動会をはじめとした豊かな学校行事を通して
「語る言葉をもつ人」の育成を使命としています。

「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です」この言葉は新約聖書のコリントの信徒への手紙一3章6節に記されている有名な箇所です。伝道者パウロは、「主なる神様が与えてくださった分に応じて仕えたいに過ぎない」と語っています。女子聖学院は今年度創立113周年を迎えます。先達の多大なご尽力があってこそ今日があります。先輩諸氏に敬意を表すると共に生きて働き給う神様のみ業に感謝を捧げるのみです。わたくしどもの働きは駅伝に喩えるならば、与えられた襪を次の代に確実に渡すことではないでしょうか。

女子聖学院にとって忘れてはならない人物に平井庸吉牧師がおられます。1924年に女子聖の院長に就任され、1932年から40年まで聖学院中学校長を兼任された先生です。教頭時代の1914年に書かれた交友会誌の中で、「予が希望」と題して次の五項目を語っています。「一、自修の精神を盛んにしたい。・・・(中略)・・・今の教師は余人が好過ぎる。親切過ぎる。世話を焼く過ぎる。自ら刻苦勉励して得たる知識でなくては価値がない。自分で研究し、自得するようにしたい。二、自治自願の気象を養うこと。学生をして自己の人格の尊厳なることを知らしめ、良心の声を重んじ、これに従うことを教えねばならぬ。三、共同の精神を養うこと。学校は一大家族である。(中略)快活な、無邪気な、晴れ晴れとした



〒114-8574 東京都北区中里3-12-2
Tel. 03-3917-2277
1905年創立

山口 博

女子聖学院中学校・高等学校
校長

日本基督教団大宮教会伝道師・内灘教会牧師。北陸学院中学校・高等学校・短期大学にて教鞭をとる。英国留学を経て酪農学園大学(北海道)に着任、副学園長を務める。2007年、母校である聖学院中高の校長に就任。キリスト教センター所長、副院長を経て、現在は学校法人聖学院院長・女子聖学院中学校・高等学校校長を兼務。

気分と共同精神を養成したい。四、学生互いに錬磨する気風を盛んにしたい。人の生活の大部分は朋友との関係である。学生互いに善意の忠告をなし、善意の競争をすることは知徳錬磨の一大要素である。五、靈育に最も重きを置きたい。女子聖学院存在の理由はここにあると信ずる。唯だ学生の前に説教をし、經典の講義をしたからとて、それで靈育が出来るとは思われぬ。教師その人の人格が生ける宗教であって自然に無意識に与える感化こそ真の靈育となるのである」。誠に至言ではないでしょうか。100年以上前の女子教育のさがけと言えるでありましょう。

学校は先人の大切にしてきた建学の理念を変えてはなりません。その精神を活かす場所が学校です。松尾芭蕉が説いた「不易流行」のことは借りるまでもなく、教育には変わってはならぬところと変わるべきところを識別する知恵が必要です。今年度はルーブリックを取り入れた授業改革、JSG講座、国際プログラムの充実、学校内学習の完結を目指すラーニング・センター、更に新しい学力を育てるためにIT機器を備えた多目的教室(フューチャー・ルーム)の設置を案出しました。そして、伝統ある運動会をはじめとしてJSGが誇る学校行事を通して生徒たちは大きく成長して行きます。何よりも学校は人が人として生きて行く力を育むところです。JSGの6年一貫教育は将来のキャリアビジョンが見えてくる生活の座です。

Topics



世界に向けて魅力を発信！ 「パラスポーツ映像制作 プロジェクト」

女子聖学院中学校・高等学校では、2020年の東京パラリンピックに向けて、パラスポーツの魅力を世界に届ける取り組みを展開しています。その一環として、生徒有志が聖学院中学校・高等学校の男子生徒とともにパラスポーツの魅力を描く映像制作に取り組みました。

今回のプロジェクトは、インクルーシブな共生社会を実現するために、目に見えるハード面でのバリアフリーはもちろんのこと、人々の意識における「心のバリアフリー」を成熟させることを目指します。スポーツ、医療、福祉などに関心のある女子聖学院・聖学院の生徒有志53名が参加しています。このプロジェクトは女子聖学院の教員と聖学院の教員が共同で企画したもので、女子生徒と男子生徒がそれぞれ良いところを出し合って共同作業をすることで、より良いアウトプットを目指しています。

講師には世界の貧困問題に取り組む(株)グランマの本村氏を迎え、パラスポーツの魅力を伝える映像を実際に制作しました。制作した8本の映像は3/21に聖学院中学校・高等学校で開催された「新しい学びフェスタ」で発表。今後は本村氏とTOKYOパラスポーツプロジェクト「TEAM BEYOND」と連携してパラリンピックPR活動を具体的に推進していきます。



聖学院 小学校・幼稚園

vision for the future
教育ビジョン

佐藤 慎

校長・園長

自らの力を 他者のためにも用いる人を 育てるために

聖学院幼稚園、小学校は「神を仰ぎ 人に仕う」を建学の精神とする学校法人聖学院の一員として、神から与えられた賜物と自らが習得した知識、技能を自分の幸せのためにだけ用いるのではなく、他者のために、社会のために用いる人材、すなわち他者に仕える人材の育成に努めています。

言うまでもなく人に仕えるときに一番大切なのは愛です。けれども愛することは独りよがりであってはなりません。真の愛とは相手に何が必要かを見極める感性を伴っているものです。そしてその感性は人に喜ばれる経験、よかれと思ってしたことが受け入れられなかった経験、人からしてもらってうれしかった経験、人からされていやだった経験を通して身につくものです。ですから人と関わることなしには身につけることはできません。

これらのことを踏まえて聖学院幼稚園、小学校が力をいれているのは異年齢間の交流です。

幼稚園においては上の学年が下の学年の子たちのために働く機会を意識的に設けています。年少組入園当初に年長組が世話をする、年長組が大型制作物（昨年度は人が乗ることのできる海のいきもの）を作って年中組、年少組を楽しませる、年長組がお店屋さんごっこで商品を作り、年中組、年少組を招待するといったことが代表的なものです。

小学校でも1年生の入学当初は6年生が学習準備の手伝いをします。スクールランチ（給食）は1年生から6年生まで1名ずつ6名で1つのテーブルを囲み、5年生6年生が配食などの世話をします。1年生と2年生は5月の学校宿泊、10月の宿泊行事を一緒に行い、2年生は1年生をリードします。



（小学校）
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1
Tel. 03-3917-1555
1960年創立
（幼稚園）
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2
Tel. 03-3917-2725
1912年創立

佐藤 慎

聖学院小学校校長
聖学院幼稚園園長

1979年より学校法人聖学院に置いて教鞭をとる。女子聖学院中学校・高等学校教諭（社会科）、聖学院小学校教諭を経て、1990年聖学院アトランタ国際学校の開校に携わる。2008年聖学院小学校教頭。2012年聖学院幼稚園園長。2017年第11代目聖学院小学校校長として着任（園長兼務）。

幼稚園でも小学校でも異年齢間の交流において、年上の子どもは年下の子どもにとっても優しく接します。けれども、よかれと思ってしたことが、反対に怖がらせてしまったことなども経験します。このような経験を通して、相手が何を必要としているかがわかる感性、優しい気持ち、人を愛する心が育ちます。

もちろん、愛があっても確かな知識、技能がなくてはよく仕えていくことはできません。これからの時代を生きていく子どもたちには、基礎学力に加え、しっかり英語を身につけること、そして自らの考えを発言や文章で表現する力、友達と協力して課題を解決する力を身につけることが必要だ、との考えに立って小学校ではカリキュラムを編成しています。

幼稚園も小学校も心の教育をこれからも大切にしていくと同時に、小学校の学習指導においては時代の変化も踏まえ、これから生きていく子どもたちがどのような力を身につけるべきかを見極めつつカリキュラムを編成して参ります。

Topics



英語で表現することの 「楽しさ」を

聖学院小学校では、1年生から6年生まで、週2時間を英語の授業に充てています。低学年から4スキル「聞く」・「話す」・「読む」・「書く」を指導、英語でのコミュニケーションを楽しめるようにすること、そして異文化を理解し、自分の文化を英語で発信できる素地を育てることを目標にしています。近年注目されているCLILという「内容言語統合型学習」を取り入れ、理科や社会など他教科の内容学習を英語でも行っています。たとえば1-2年生では朝顔や大豆の栽培など生活科の授業を英語で学習、大豆を収穫してから豆腐作りまで1年をかけたプロジェクトです。3-4年生では、理科の授業とコラボレーションして「チョウの一生」を英語で学習、また社会科で学習した地図記号と町の様子を英語でも学び、英語を身近なものとして捉えています。5-6年生では日本の国土、日本の食について学び、生活習慣や文化、伝統的な遊びなどを英語で楽しみながら、海外からのゲストに対してその知識を英語で発信します。5年生になると「英語キャンプ」に参加。英語づけの3日間を過ごし、英語で自分のことを表現することの楽しさを体験します。また放課後、希望者向けに「Kids English」というプログラムを実施。校内で、7-8名の児童に一人英語教師がつき、楽しみながら総合的な英語力を身につけます。



まだまだあります！

Seig NEWS

学生も生徒も教員も教授も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学

児童学科の学生が 「児童学海外研修」に 参加しました

児童学科の学生5名が、約4週間のアデレード（オーストラリア）にあるフリンダース大学での児童学海外研修に参加。フリンダース大学で英語によるディスカッションなどの英語力のスキルアップのためのプログラムを行いながら、チャイルド・ケア・センターや小学校を訪問しての実技研修や実習を中心とした、有意義な研修期間を過ごしました。



聖学院大学

埼玉県内の治安向上を目指し 「大学生による 防犯ボランティア」が 結成されました

埼玉県内の治安向上を目指す「大学生による防犯ボランティア」を新たに結成しました。2月15日（木）には学生防犯ボランティア結成・出発式を開催。週1回ずつ定期的にパトロール活動を行っています。「防犯ボランティア」は埼玉県が支援している制度。結成後はベストや帽子の貸し出しや研修の実施などの支援が行われています。



聖学院大学大学院

第6回埼玉税法研究会が 開催されました

聖学院大学大学院政治政策学研究科税法コース在籍者・修了生および関連の教員を中心として、税法研究の研鑽と親睦とを目的に2015年9月に設立された埼玉税法研究会。5月12日（土）の開催は第6回目となり、70名の方にご参加いただきました。また、今回の第一部の基調講演は関東信越税理士会および東京税理士会の研修としても認定されています。



聖学院中学校・高等学校

聖学院高校・大学連携企画 「今僕たちにできること」 が開催されました



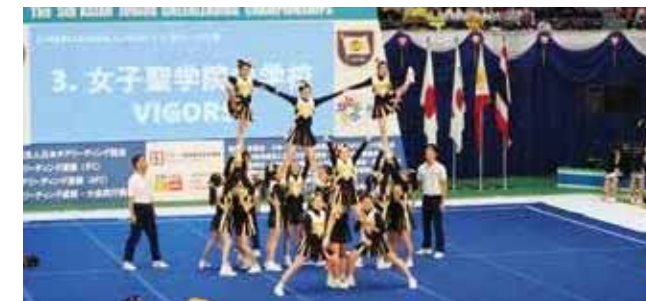
3月12日（月）、聖学院中学高等学校の314教室で聖学院大学ボランティア支援センターと聖学院高校生徒会合同のワークショップが開催されました。今年で4回目となるワークショップの内容は、東日本大震災の被災家族が今どういう思いで過ごしているのかを紹介するテレビ番組を上映し、聖学院大学の学生による被災地ボランティアの活動報告、そして今自分たちにできることをグループワークで考えるというもので、聖学院高校の生徒、30名ほどが参加しました。被災者支援というと現地に行つてのボランティア活動というイメージがありますが、「現地に行かなくても被災地の現状を知り、自分たちにできることを考え、風化させないことはできる。それだけでも被災者支援につながっている」というのがこのワークショップの柱になっています。グループワークでは「被災地の子どもの遊び場がない現状と、仮設住宅のためコミュニケーション不足になってる人がいるという問題を解決するために、人と子どもをマッチングさせる場を作る」などかなり具体的な案も出ました。また、「被災者の立場に立ってみないとわからない。できることを考えることでわかることがある。」という意見が印象的でした。



女子聖学院中学校・高等学校

第16回吹奏楽部 定期演奏会開催

3月29日（木）、北区王子にある北とぴあ・さくらホールにて、女子聖学院中学高等学校吹奏楽部の定期演奏会を開催致しました。会場いっぱいの聴衆が見守る中、堂々と演奏を披露しました。前日のチャペルから聞こえてきたリハーサルの演奏からも、本番への想いが強く響き渡っていました。今回で16回目となった定期演奏会ですが、この日のために何度も練習を重ね、仲間と励まし合いながらより良い演奏のために努力し続けてきました。



女子聖学院中学校・高等学校

チアリーディング部 創部30周年

チアリーディング部VIGORSは、2018年に創部30周年を迎えました。4月28日（土）に行われた東京都高等学校総合体育大会第5回チアリーディング大会では、3層部門で入賞。また、5月12日（土）・13日（日）、「高崎アリーナ」で行われた「第12回アジア・インターナショナルオープン」と「第5回アジア・ジュニア」にも出場いたしました。この大会では日本をはじめ9か国の地域から1300人の選手が出場しました。女子聖学院は決勝でも演技を行い、たくさんの声援をいただきました。

聖学院大学大学院

人間福祉学研究科の カリキュラムが 大きく変わりました

2018年度より人間福祉学研究科のカリキュラムを大きく変更、従来の「福祉学」、「児童学」、「心理学・臨床死生学」の3領域分野での構成を、福祉社会・共生社会の担い手として貢献する高度な専門性を持った人材養成を目的とする「共生社会特論」「心理学特論」「対人援助特論」「児童学特論」というカリキュラム構成としました。ニーズのあるテーマのため科目等履修の利用者もあります。



聖学院中学校・高等学校

故林田秀彦先生記念会

2017年12月に逝去された林田秀彦先生を記念する会が、3月24日（土）午後2時より、聖学院中学校・高等学校講堂にて行われました。300名近い参加者があり、20年にわたって校長を務められた林田先生のお人柄が偲ばれました。元学校法人聖学院院長の小倉義明先生より「満ち溢れる器」との題でメッセージが語られ、神様が林田先生を通してわたしたちに示してくださった恵みの一つ一つを覚える時となりました。



聖学院小学校

「iPad教育」が雑誌「MacFan」(5月号)に取り上げられました



2017年度にADE (Apple Distinguished Educator) に認定された池内清教諭が「子どもの楽しいを引き出す文房具としてのiPad」と題した記事で、取材を受けました。聖学院小学校では、2012年の新校舎建築をきっかけにiPad導入の検討を始め、それまであった「コンピュータ室」を設けず、普通教室でコンピュータを使える環境に切り替えました。2015年度からは4年生以上の児童全員にiPadを支給、1～3年生は共有iPad50台を用意し「Shared iPad」のシステムを使って一人一台の環境を実現しています。取材の中で池内教諭は「子どもたちにはiPadを使って問題を解くよりも、iPadで思ったことを表現できるようになってほしいんです。試行錯誤しやすいメリットを活かして“何を引き出すことができるか”という活動に使うことが大切だと考えています」と語りました。

聖学院幼稚園

母の日礼拝・参観

5月9日(水)、「母の日礼拝・参観」が行われました。礼拝のあとお部屋に移動し、参観をしていただきました。母の日のプレゼントはお母さんの似顔絵です。大好きなお母さんと幼稚園でずっと一緒に過ごせるので子ども達は大喜びで大興奮!でも、きっと一番うれしかったのはお母さんだったことでしょう。「いつもおいしいおべんとうありがとう!」「おかあさん、だーいすき!」似顔絵の裏は愛情たっぷりのメッセージ。いつもは少し照れくさいけれど、今日はお母さんにたくさん「だいすき!」を伝えました。



聖学院幼稚園

2018年度
聖学院幼稚園入園式

4月11日(水)、2018年度聖学院幼稚園入園式が執り行われました。今年は新たに年少組に41名、年中組に6名のお友達が加わりました。年長さんのエスコートで入場、ちょっぴり心細くて泣いてしまう子もいましたが、多くの方にお祝いされ、無事入園式を行うことができました。多くの方からのお祝いメッセージ、本当にありがとうございました。



聖学院みどり幼稚園

イースター礼拝

4月23日(月)、主イエス・キリストの蘇りをお祝いする「イースター礼拝」を守りました。年少組の子どもたちはこれが初めての礼拝です。聖書を読んだり、讃美歌を歌ったり、お祈りを捧げることで、これから始まる全園礼拝の導入にもなっています。また、沢山の保護者の方もご参加くださり、一緒に礼拝を守ることができました。



聖学院みどり幼稚園

つくしの会

4月28日(土)、卒園生を招く「つくしの会」を開催しました。つくしの会は、現在小学生～中学生である卒園生が集まる同窓会です。毎年100人前後の卒園生や保護者の方がお越しになります。オリエンテーションでは全員でゲームを楽しみ、最後は幼稚園時代によく歌った讃美歌を歌い礼拝を守りました。当日は天候にも恵まれて、創立40周年に相応しい特別な1日となりました。



皆様の寄付のおかげで、
素晴らしい施設ができました。

ASFへの寄付が建設費用に当てられた施設紹介



【聖学院中学校・高等学校(校舎・講堂棟)】
1999年竣工 創立90周年記念事業



【聖学院中学校・高等学校(フューチャーセンター)】
2016年完成



【聖学院大学(チャペル)】
2004年完成 設計者の香山壽夫氏は、このチャペル(礼拝・講堂等)を対象作品として、2005年度日本芸術院賞に選ばれました。



【聖学院大学(I café)】
2016年完成 地域共生広場I café



【女子聖学院中学校・高等学校(校舎・教室棟)】
2008年竣工 100周年記念事業



【聖学院小学校(校舎)】
2014年竣工



【聖学院幼稚園(園舎)】
2013年竣工